

「実践・研究・実践研究を問い直す」

—日本語教育における実践研究のこれまでとこれから—

# 実践フォーラムの「今とこれから」

堀井恵子(武蔵野大学大学院)

キーワード **学び・ことば**

よりよい実践のために

デザイン、振りかえり、教育観

共有のための記述

実践のデータ

# 実践研究にかかわった経緯

\* 日本語教師⇒私の工夫・私の失敗

実践研究

\* 日本語教員養成⇒自律型成長する教師  
学習者の多様化・教える教師から支える教師へ

\* アカデミック・ジャパニーズ教育研究⇒学び

⇒ことばの教育による人材育成

←思考とコミュニケーション

共有のための  
実践研究

\* 仕事の日本語教育⇒問題発見解決能力

## 教育実践の中で

---


日本語教員養成・教授法/実習  
ゼミ: 日本人学生・留学生混在⇒論文指導  
PBLによるビジネス日本語教育、その他  
振りかえりを通して授業実践を修正・改善

\* 実践研究フォーラム委員として…

実践研究

実践研究

実践研究



## 実践研究フォーラム '04～07まで(第1ステージ)

---

### 実践研究とは何か

- なぜ実践研究が必要なのか？
- なぜそれをフォーラムで共有するのか？
- 「よい」実践研究とはどのようなものか？

⇒ **PDCA**が実践研究であることの共有

(舘岡2010)



## ‘07までの論点

---

Q1:どのように評価・振り返り・検証をするのか

Q2:その結果をどのように実践(改善)に結び付けていくのか

Q3:その際にはどのような工夫, 問題点, 課題があるのか

## 実践フォーラム第2ステージ'08～

---

- 実践を研究にするために  
⇒ 記述・分析を考えよう

### 実践研究からの発信

'08—記述分析そして共有へ

'09—実践を見せる記述・実践が見える分析—

'10—現場の「問い」を「研究」にする記述・分析

'11—実践・研究・実践研究を問い直す

## 第2ステージの背景

○ 査読者の声 . . .

客観性? 方法論

○ 他分野からの声 . . .

実践報告?

仮説検証?

○ 日本語教師のつぶやき . . .

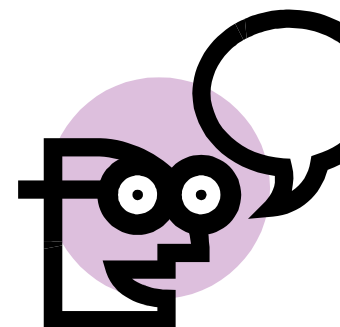
研究論文?


質的研究?

社会的地位

○ 日本語学から日本語教育学へ

⇒ 実践研究(フォーラム)再考





# 実践研究をめぐる人々 だれのための実践研究？

---

- 実践研究をしている人
- 実践研究を推進/批判している人
- 実践研究に関する研究をしている人
- 実践をしている人
- 研究をしている人
- 学習者





再び..

実践をよりよいものにするためには

---

実践者が実践を振り返る

- なぜその実践を行ったか
- その結果何が起こったか
- 課題と改善策は？

共有のための記述・他者との対話

実践(学習者)への還元



## 実践者の課題

---

現場の忙しさ/教師の孤立

失敗も含めた実践の発表の場？

実践を共有し、考え合う相手

共有のための記述の仕方

授業データの取り方



# 論点1: 実践研究のこれから

---

\* 「いわゆる」論文でなくてもよいのではないか  
または新しい研究の形があるのではないか

⇒ よりよい実践のために

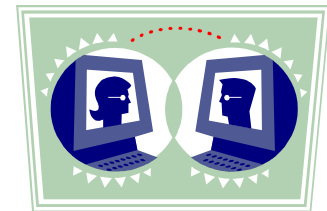
⇒ 自らの教育観を問い直すために

\* 研究方法について？

\* 質的研究として説得力を持つだけの記述量  
を含められるWEB版などによる発表の場  
が必要では？

# フォーラムのコンセプト

参加者一人一人の発信を軸に、  
参加者それぞれが日本語教育の  
**実践について考え、議論すること**で、  
実践と研究の関係を  
自分の問題として捉え、  
**新たな実践への視座**を得る場  
を提供する。





## 論点2: 実践フォーラムのこれから

---

学会の大会とは違う場

発題者にコーディネーターがよりそう形は  
ひきつづき…

共有のためのたくさんの実践研究が

発題され、議論され、練り上げられてい  
く場⇒フォーラムが研究の場？

\*実際の応募とのギャップ？



## 参考文献

---

舘岡洋子(2010)「実践研究」は何を目指すか』『早稲田教育学』第7号

市嶋典子(2009)「相互自己評価活動に対する学習者の認識と学びのプロセス」『日本語教育』142号